



SDGsと国際理解を育むアジア協働型パラスポーツ英語教育プログラム

教育学およびその関連分野

研究者所属・職名 : 教育学部・教授

ふりがな しもながた しゅうじ
氏名 : 下永田 修二

主な採択課題 :

- [基盤研究\(C\) 「国内外で行う英語教育と体育を融合した体育・スポーツ実践プログラムの開発」\(2021-2024\)](#)
- [基盤研究\(C\) 「SDGs達成に向けたパラスポーツを組み込んだ教育プログラムのアジア協働での開発」\(2025-2027\)](#)

分野 : 高等教育学、身体教育学

キーワード : 体育、パラスポーツ、国際理解教育、CLIL、英語教育、SDGs

課題

●なぜこの研究をおこなったのか？(研究の背景・目的)

グローバル化の進展により、英語によるコミュニケーション能力と異文化理解力の育成が教育現場で急務となっている。体育・スポーツは言語を超えて人と人をつなぐ交流の契機となるが、その教育的活用はこれまで十分に体系化されてこなかった。そこで、本研究では、英語教育と体育を融合したCLIL型(内容言語統合型学習)プログラムの開発を行い、スポーツ活動を通じた英語表現力・協働性の向上効果を確認すること、さらに、その成果を発展させ、SDGsとパラスポーツ教育を組み合わせたアジア協働型プログラムを構築し、共生社会の形成に資する国際理解教育モデルを開発することを目的としている。

●研究するにあたっての苦労や工夫(研究の手法)

英語×体育・パラスポーツの実践を行うためには、活動場所の確保や多国間調整に多大な時間と労力を要した。ASEANの大学や教育現場との連携には、SHINE(Sports & Health International Network for Education)プログラムを立ち上げ、千葉大学アジア・アセアン教育研究センターのネットワークを活用し、オンラインと対面を併用して協働体制を整備した。国内でも日本人学生を対象に継続的な実践を行い、プログラム内容の改善と検証を繰り返した。

Sports & Health International Network for Education



異文化の中で、他者と調和しつつ、自らを表現し、自己実現していく → グローバル人材の育成

図1 SHINEプログラム



SDGsと国際理解を育むアジア協働型パラスポーツ英語教育プログラム

教育学およびその関連分野

研究成果

● どんな成果がでたか？ どんな発見があったか？

【英語×体育融合による新たな学び】

大学体育・スポーツ・健康科目において英語を用いたCLIL型授業を展開した。学生は活動内容に応じた英語表現を活用し、「英語使用頻度」と「身体活動量」の二軸で活動が分類されることを示した。英語活用力・協働意識・活動満足度の向上が確認され、英語によるスポーツ実践が自然な言語活動として機能することが明らかとなった。

【CLIL型体育授業の教育的意義】

CLIL型体育活動を通じて学習意欲や英語使用の積極性が高まる一方、教材難易度や指導支援に課題がみられた。これにより、CLIL授業の普及には教材開発と教員研修の両輪が不可欠であることが示唆された。

【SDGs・パラスポーツ教育のアジアへの発展】

SDGsおよびパラスポーツを融合した国際理解教育を構築するため、日本とASEANの学生を対象に比較調査を行い、体育授業頻度（日本2.3回/週、ASEAN1.4回/週）や保健教育経験（日本98.2%、ASEAN71.1%）に差を認めた。SDGsの認知度は日本97.4%、ASEAN73.3%、パラスポーツ実施経験は日本33.9%、ASEAN0%と日本が高く、ともに大きな差が認められ、教育段階における学びの違いが明らかとなった。

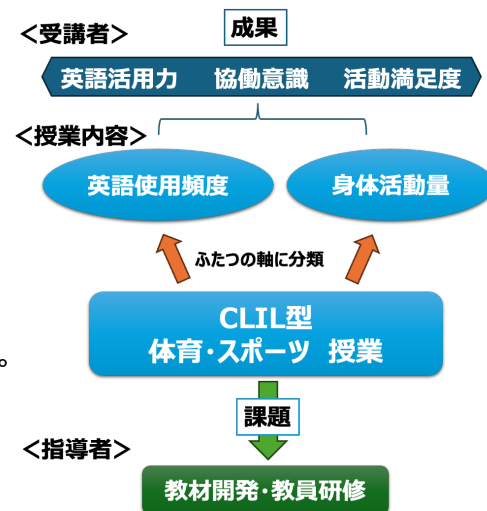


図2 体育・スポーツ・健康科目におけるCLIL型授業の成果と課題

今後の展望

● 今後の展望・期待される効果

今後は、千葉大学アジア・アセアン教育研究センターのネットワークを活用し、アジア・アセアンの大学と協働して「SDGs×パラスポーツ×グローバル教育」を統合した国際共同プログラムを展開する。パラスポーツを基盤に、健康・平等・平和に関する学習を統合したカリキュラムを構築し、各国の授業で実践・効果検証を行う予定である。これにより、体育・英語・SDGsを融合したアジア協働型教育モデルを確立し、包摂的な社会づくりとグローバル教育リーダーの育成に寄与する。

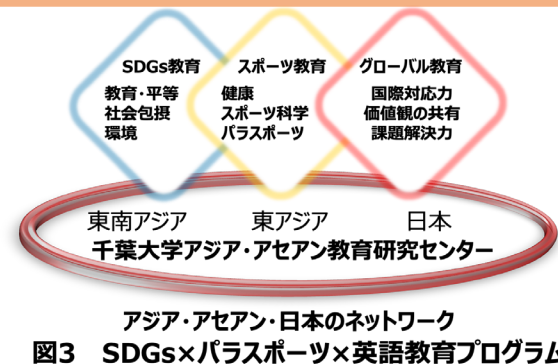


図3 SDGs×パラスポーツ×英語教育プログラム